５年の月日

檜山医師会
乙部町国民健康保険病院　野村健次

この地に来て５年が過ぎた。

南檜山一帯の医療体制は崖っぷち。

取りあえずと、雇った医師（註：私の着任前からいた）の自分とは異なる方針の診療体制から脱することのできた最初の１年。

が、医療人の高齢化と人材不足は凄まじい。

常勤１人体制で何とか切り抜けたこの４年間。

それまで３人でやっていた業務以上の仕事を１人でこなしてきたという自負がある。

が、多職種がもっとサポートしてくれたらもっと楽にできたはず。

医師が来ないなら、せめて事務サポートをつけてほしいと言い続けたが、閑散とした病棟への人員補充には熱心でもこちらの苦労には目も向けず。

３カ月以上前から予告していた学会出張なのに前日になり代わりの医師が手当出来ませんでしたの一言。

2024年８月（註：６月ではない）療養計画書を作成してくれと突然告げられ、朝６時から毎日毎日外来直前まで書き続けた療養計画書の数々。

多職種がその療養計画書を一緒に作成して、患者さん一人一人に丁寧に指導してくれたら患者さんの生活はもっともっと安心で快適になったはずなのに･･･。

コロナ補助金が終わり、大赤字となった2025年度決算。

来た当初から補助金が終われば赤字になるから体制を変えましょうと叫び続けたのに。

職員も役場も議会も何も応えてくれなかったこの５年間。

昨年末になり急に入院患者を増やせとプレッシャーをかけてきた。

それを言うなら人口を増やしなさい！

独り暮らしの高齢者の受け皿も整えず流出させ続けているのは誰なんだ！

予防的な医療をやればやるほど入院患者が減るのは当たり前だ！

この４月からようやく若手医師が来てくれた。ホームページを見て応募して来たのだという。

やりたいことをサポートしてあげるからぜひ来なさいと固く握手。

議会から早く医者を探せと突き上げられていた役場幹部たちは、自分たちが連れて来たのだと言わんばかりに議会にお披露目。

私が来たときはそんなことしなかったのに･･･。

結局この地では自分の思い描く医療・介護・福祉の連携体制構築は叶わないと思い知らされた５年間。

それでも慕って来てくれる患者さんや同じように頑張っている近隣の医師たちが僕の心の支えになっている。

破綻してみないと分からない日本の社会にはうんざりするけれど、僕はこの仕事に出会うことができて幸せだ。

いつまでできるか？

留萌医師会
わたべ整形外科医院　渡部哲也

私は父の整形外科を継いで留萌でクリニックを開業している。開院時は有床であったが、15年前より看護師の確保が困難となり無床へと変更している。無床になってから朝６時に診療所の開錠を自分でしている。予約制ではないため診療券を受付箱に入れてもらい、順番で診療している。無床になる時に開錠時間を遅らせることを考慮したが５時半位に早く受付のため車で玄関前に待っている人がいるので時間の変更ができていない。そのおかげか早起きの癖がついた。朝のルーティンは院内の見回りである。ある朝いつも通り見回りをしに行くと天井より滝のように水が流れていた。雨漏りかと思いきや天気は晴れなので違うらしい。どうも排水管から漏れているらしく配管業者に診療前に直してもらった。業者曰く配管あちこちにサビている場所があり、そこから漏れるとの話だった。完全に修理するとなると全部取り換えるしかないとの話で応急処置のみに留めている。開院して55年経過しており鉄筋とはいえ内側は老朽化するためやむを得ない。新築でもしてすっきりしたいところだが自分の年齢と留萌の今後のことを考えると躊躇してしまう。結局、現在の古い施設を改修しながら診療するしかない。開業時には水産業と数の子などの水産加工を中心として留萌の人口は約４万人いた。大都市圏以外は同様だが、留萌も過疎化で現在約１万７千人である。当然のように患者も減少する。最近近くの先輩の整形外科の開業医も閉院した。先日旅行中の怪我をした都会の患者さんが当院を受診して院内の写真を撮っていいですかとの話で理由を聞くとレトロな感じで郷愁を誘ったらしい。ずっと居ると不便しか感じないがレトロを売りにするのもありか。都会のクリニックだと患者さまの争奪戦がありそうだが、田舎では選択肢が少ないのでその点は楽なのかもしれない。あと何年診療できるか分からないが、父の残した古い建物と30年以上通う患者さん、長年勤めている職員のために足掻き続けるしかないと考えている。昔（父の時代）はよかったなと思いながら。